Ⅲ．お殿様・お城御用達のものづくり

松江城を築城し、城下町の根幹を作り上げたのは、最初に松江に入府した堀尾氏です。当時は白潟、末次の中世湊町しかありませんでしたから、ものの調達には中世の商人たちを使いながらも、手探りで進めていったところも多いと想像できます。やがて城主は京極一代を経て松平氏が入府し、城下町や周辺の在郷とのネットワークも整い、様々なものが松江周辺で作られ、お城に収める仕組みも整ったと考えられます。

現在にまで影響を与えている御用達のものづくりを見ると、特筆されるのは松平家七代藩主治郷（不昧公）です。不昧公の時代には近世社会の成熟に伴って、商品生産と貨幣経済、消費の拡大と文化の発展が全国的に進む中で、御立派の改革による藩政改革に成功します。それを背景に不昧公は茶の湯に没頭し、多くの美術品収集や国元松江でも茶の湯を中心とした文化を根付かせていきます。松江でのお抱え工人も多く雇い、独自のものづくりを展開させていったことが、後世の松江のものづくりにも大きな影響を与えました。

初代小島漆壺斎≪菊蒔絵棗≫
松江歴史館蔵

ここではお殿様・お城御用達として、次の項目を取り上げていきます。

13　陶芸

14　和菓子

15　漆

16　金工